

韓国の「徐福伝説」考

許玩鍾

一、はじめに

方士徐福（徐市ともいう）に関する記述は、中国の古書『史記』の「秦始皇本紀」第六や「淮南衡山列伝」第五十八、「封禪書」第六、『海内十洲記』、『三國志』の「吳書」卷第二吳主孫權伝の他、多くの史書に記載されているが、『史記』の「淮南衡山列伝」の記述を見ると、最後のところに「徐福、平原・廣沢を得て、止まりて王となり、帰らず」とある。これに因んで日本の和歌山県の新宮市には、江戸初期、紀州藩祖徳川頼宣が建立を計画し、およそ百年後の元文元年（一七三六）に新宮藩五代水野忠昭によつて建てられたと伝えられる徐福の墓がある。また、熊野地方には徐福が一族五百人をしたがえて薬草の栽培や捕鯨を業として生活したという伝説もある。さらに、徐福の日本渡来について、日本では中世の北畠親房の『神皇正統記』第七代孝靈天皇の条に、これに関連する記述があり、

江戸時代初期の林羅山の『羅山文集』や江戸時代中期に出た年表『和漢合運』の中にも徐福渡来に関する記述が見られる。この様に、秦の始皇帝の臣下である徐福が不老不死の薬をもとめて日本にきたという記録はいろいろな書物に散在している。韓国でも日本と同様で、徐福伝説は多くの地域に伝わっている。中でも特に有名なのが濟州島の西帰浦に伝わる伝承で、正房瀑布の岩壁に「徐市過此」と刻まれていたとされている。また、徐福伝説と関連して慶尚南道の巨濟郡の海金剛マウル（村）雨祭峰の絶壁に「徐市（氏）過此」と刻まれていたとの伝承もある。この様に、徐福によつて求められ海の彼方にあると信じられた三神山の異郷は、単に伝説だけに止まらず、韓国では説話文学の発達にも大きな影響を与えてきた。例えば、パンソリ『水宮歌』では兎が竜王を嘲弄する肝の置き場として三神山が登場しており、民謡では「三神山採薬歌」として歌われ、説話では「秦始皇と不老草」として語られ、また、巫歌にもよくこれらの山名が登場する。これに因んで朝鮮時

代成立の古地図「東國八道大總」などでは、現在の江原道の金剛山を蓬萊山、金羅道の智異山を方丈山、濟州島の漢拏山を瀛洲山にそれぞれ当ててある。

本稿では、韓国の古地図に表現されている、異郷の世界観を踏まえながら、日本や韓国に見られる徐福伝説を取り上げ、その分布を明確に示すとともに、韓国の徐福伝説のもつ意義を探り、文化の伝播や影響の相互関係を考察してみたいと思う。

二、韓国の徐福伝説地への旅

徐福の行方不明の真相を知るには、ともかく徐福と縁のある場所に足を運んで、そうしてその実相を見、その地域の人々の声に耳を傾け、その伝説の源泉の流れに沿って、共に最後の帰結まで同行しなければならない。それからその実体を見て全体像を描くためには、内側から一步飛び出し、外からの視座で見つめなければならない。この章では韓国のごく一部の地域だけに限られるが、徐福の行方を追う同行の一環としてまず、当学会発表の前の二〇〇四年三月二十五日から三十七日の間に行った徐福伝説の現地調査を中心についていきたい。

(一) 南海島の良阿里刻字(三月二十五日)

慶尚南道南海郡尚州面良阿里の刻字は、ソウル高速バスターミナルからバスで晉州まで行き、晉州から南海邑へ、

南海邑から尚州・彌助行きのバスに乗って錦山入口で降り、そこで、反対の方向に向け国道十九号線に沿って三十分ほど歩き、金網に山火事注意の表示のあるところから山を登りはじめ、十八分ほど歩いたところに位置している。亀の背中のようにも見える縦約四メートル横七メートルほどの平たく丸みのある大きい岩の一部に、縦約五十センチ、横百センチ程の幅で古代文字のようなものが刻まれている。これが南海島に伝わる徐市関連の刻字なのである。岩の傍らには説明のための案内板があるが、これにはこの刻字をめぐる今までの学界におけるおおよその見解が記されている。紹介すると次の通りである。



図1 南海島の徐市題名刻字

「南海尚州里石刻。慶尚南道記念物第六号。慶尚南道南海郡尚州面良阿里。亀岩と呼ばれる、この岩に刻まれた文字または文様は、一般的に徐市が此處を過ぎたという意味の『徐市過此』として解釈されている。言い伝えによると、昔、中国を統治した秦始皇帝が侍従の徐市に童男童女五百人を与えて不老草を求めて来るよう命じ、徐市はここまで来た。しかし、徐市はこの世の何処に不老草があるものかといつて此處で狩猟ばかり楽しんで去った。その

時、徐市は自分がここに来たことを後世に残すため、この文字または文様を刻んだという。しかし、既に秦の時には漢字が使われていたため、こういった話は説得力が弱い。それゆえ、このをめぐる解釈は様々である。単純な動物の足跡という見解、我が国の古代文字であるという説、または契丹やサンスクリットの文字であるという主張もある。ところがここ南海から近い豆毛里をはじめとして多くのところでこれに類似する文字、または文様を刻んだ岩が発見されている。したがって、これらの文字又は文様はここ南海の古代文化と関係する重要な資料として評価される」

これを見て思うに、この地方ではこの刻字が徐市の渡韓を物語る「徐市過此」、つまり、徐市が此処を通過したという意味で捉えられていることが分かる。ただ学界においてはどのように議論されているのか、上記の説明文だけではその詳しい事情を知るには不十分である。が、「徐市過此」という解釈だけではなく、いろいろな説があるといふこともうかがい知ることが出来る。この刻字をめぐる解釈については、今後詳しく述べることにしたい。

錦山のこの刻字は、わざわざここに足を運ばない限りその素顔を見ることが出来ない。文字通り世俗とかけ離れた山中に身を隠しているからである。それ故に長い歳月をものともせず、刻まれた時の形を有したまま生き残ることが出来たと思われる。これには世俗の風を近寄せない山中の環境が大きく影響したことであろう。このように刻字は近所の村とともに

なり離れ、人家の見えないところに位置している。地元の人から刻字について聞きたかったが、この刻字を探し求めるだけで日が落ちたので、それは別の機会にすることにし、次の調査地の海金剛に行くため、南海邑に戻った後、またバスで晉州へ戻り、晉州から統營へと移動した。

(二) 海金剛マウルの雨祭峰の刻字とグルレソム (ぶらんこ島) (三月二十六日)

巨濟島の海金剛は統營から市外バスで一時間十分ぐらい離れたところにある。バスを降りたところの、家八十戸・人口三百人程度が住むこの小さい村を海金剛マウルというが、ここに「徐市過此」とも「徐氏過此」ともいう伝説が代々語り継がれている。

村の入り口で出会った五十代と思しきの村人にその伝説について尋ねたところ、「あそこに徐伽藍山という山があるが、昔、徐市という人が三千の童男童女を従えてここに来たという話を聞いたことがある。刻字の位置は知っているが、文字は見えない。若者たちは知らない筈だから、お年寄りに尋ねてみるがいい」と言わされた。

刻字についてより詳しく聞いてみると、海金剛の遊覧船案内所を訪れたところ、そこには二人の女性の職員がいたので、それについて尋ねてみた。すると、刻字の痕跡は雨祭峰の後ろ側にあるが、そちらへの遊覧船は通っていないため見

ることは出来ない、だからそれを確認するには誰かの漁船を借りるしかないという。



徐といふ しばらくして、長い間、海の上で働き、それについてよく知っているという海金剛遊覧船のアリラン3号船長の朴昌植氏を職員に紹介してもらい、その伝説を聞きました。以下は朴昌植氏から聞いた話である。

「(海金剛のどの島、どこにそれがあ

るんですか) 海金剛ではなく、いま、こ

ちらのこの雨祭峰、祈雨祭をおこな

うところを徐ガラム山というんですが、あそこにあの中国の秦

始皇の時に、不老長生するために徐市という薬剤師に三千の童男童女を与えて、不老草を求めて来いとここに送ったので

す。その時、徐市という薬剤師は、ここで多くの薬草を求めて去るところで、自分がここに寄つて去るというそいつた

か見えていません。そこで、今ここに見えるこの山、この後ろ側に見える山のことを徐ガラム山といい、徐氏が寄つて去った山といつて徐ガラム山、またはまあ雨祭峰とも呼びますが、それは雨が降らなかつた時、郡の員(郡守の尊称)が、この山の頂上において供え物をして祈雨祭を行なつた山だから、祈雨祭峰、雨祭峰といい、または徐氏が寄つて去つた山といつて徐ガラム山。(ガラムという漢字があるんですか)私の知るところでは漢字を…。何の漢字を書くのか分かりませんね。漢字は正確には分かりません。徐氏が寄つて去つた山、だから、徐哥(ソガ)が寄つて去つた山だからといって徐ガラム山になるもので。徐氏に使われるガの文字は何のガの字かそれは分かりません。

そしてもう一つの由来は、徐氏由来のもう一つは、ええと獅子岩と千年松との間で、獅子岩の上に昔、松の木が一株生えていたそうです。獅子岩とその向こう側を見ると松の木、千年松という松があります。ここに綱を結んでおいて下に船を浮かべて、ゲネ(ぶらんこ)に乗つたといつて(ゲネに乗つたんですつて?) ゲネに乗つた…。三千童男童女が退屈凌ぎにあそこに船を浮かべて、ゲネに乗つた場所だといつてゲネ島とかまたは、あるいはグルンダ(こぐ)という意味としてグルレ島。(グルレ島?) こぐという意味なんですね。(グルレ島?) はい。グルレ島だと、こうまあ岩島を指して呼んでいることなのです。獅子岩がぽつりと離れているから島と島とに、まあ綱を、綱を繋いで、ゲネに乗つたからゲネ島、ゲ

ルンダ(こぐ)という意味で、グルレ島だと。ですから秦始皇の、徐市という薬剤師が寄つて去つたという痕跡をここで容易にうかがえるところが、伝説が、あいう伝説が伝わってきているのです。(一ヶ所ですか)徐ガラム山と…。しかし、まあ筆体、僕らのお爺さんの時代、聞いた話ではあそこの徐氏過寄つて去つたという痕跡がみられることなんです」(慶尚南道 巨濟市 南部面翌串里 山一一番地 朴昌植・四十歳(海金剛村 遊覧船の船長))

以上の朴昌植氏の話は、数時間後に聞くことになった里長の金玉徳氏の話とほとんど一致する。では、金玉徳氏の話を聞いてみよう。

「ここが大韓民国の海金剛というところですが、ここは昔、中国の秦始皇の時、秦始皇が不老長生しようと、臣下の徐市を三千人の童男童女と共に不老草を求めて来いとここに送つたんです。それで、あの濟州島を経て、南海を経て、ここに来たんですが、あの不老草が三神山にあると、まあ言われたから、あっちの西側から、南海側から来ながら眺めると、あの海金剛の島があそこの雨祭峰側から眺めると、島が三つです。島が…。正面から眺めると…。したがつて、徐市が『あー、此処が三神山だ。此処が三神山だ』と思つてここで、まあ多

年間にわたつて、隠遁を、ここで過ごしたようです、ここです。まあ、あの山が徐伽藍山ですが、徐氏が隠遁をして去つたといつて徐伽藍山で、その痕跡としてあの峰が雨祭峰ですが、雨祭峰のその絶壁の下に徐市過此という、あの四文字の文字を残しておいたんです。それをあの、昔から老人達の口を通して言い伝えられてきたんですが、サラ号台風があつた頃でもその文字があつたそうです。文字は見えたんですが、サラ号台風の時に、あの岩壁がまるごと崩れ落ちてしまつたんです。長い歳月が経つたものですから、岩壁が崩れ落ちたのです。今もあそこに行けばまあ黄色く岩壁の崩れ落ちた痕跡があります。痕跡があつて。その時、徐市がここで隠遁をしながら、あそこの獅子岩と向かい側にある千年松とにグネ(ぶらんこ)の綱をかけて童男童女らがグネに乗つたといつて今もある獅子岩を、昔は僕らはグルレ島だ、グルレ島。すなわち、いわばまあグネ島だ。グネに乗つたからといってグネ島だと呼んだのです。私の幼い頃から…。幼い頃から私達が聞くにはグルレ島に聞いたのです。で、まあ、あのグルレというは何なのか。グネだ。まあ、言い伝えではグネで、今は形が獅子が口を開けている模様のようだといつて獅子岩に改名したのです。改名になつたのはここが観光地に変わり、観光地に変わつて、まあ、多くの市民のお客さんがやつてきて、あれ、あれは獅子の口のようだといつて、獅子岩になつたものです。今も、あの雨祭峰のあそこに行けば徐市過此と書いてあつた

痕跡を船に乗つていけば見ることが出来ます」（慶尚南道 巨濟市 南部面呑串里 金玉徳・五十歳（海金剛村の里長））

この様に船長・里長ともに雨祭峰の刻字、そして現在獅子岩とも呼ばれるグルレソムを徐市（氏）一行が不老草を求めに来て暫くの間、滞在して去った証として受け止めている。これには文字即ち「徐氏過此」或いは「徐市過此」ともいう刻字の存在の影響を強く感じられる。ただ、残念なことに、刻字はサラ号台風以前まではあつたというが、その後、崩れ落ち、現在はその痕跡だけしか見られないというのである。もしかしたら村人の中には、刻字を見た人がまだ生きているかも知れないと思い、村でも一番年長者である金五俊氏のお宅を訪ねてみた。文字を書けないという八十五歳の金五俊氏はその刻字について次のように話してくれた。

「何處からか誰かが乱を避けて逃れてきたと聞きましたが…。見えません。今は見えません。昔、船に乗つていきながら、行きながら書いておいたというんですが、海水が減つたのか見えません。（それを見たことはありますか）わしらも見たことがない。徐氏過此といつてね。老人たちが…。（老人達からあつたということを聞いたんですか）はい。（それなのにお爺さんは見たことがないのですか）わしらは見たことがない。どうしてか（昔より）海水が減つてしまつたということじゃ。船に乗つていきながら文字を刻んでおいたというが、海水が

減つてしまつたから頂のように遠く見える。（多くの方が台風の時に崩れ落ちたというんですか…）台風の時に崩れ落ちたといふのはそれはウソ（ここでは彼らがよく知らずに語っている印象をうけた）で、チヨツテバウイ（燭台岩）というのが少し、崩れ落ちたんだ。小さい頃、雨の降らない日が続くと、雨祭を行つていたもので、それであれを雨祭峰だと言つたものです。雨祭を行うのは見たことがあります」

以上の金氏の話では、刻字と関連して秦の始皇帝や不老草の内容は見えない。誰かが乱を避けて逃れてきたといつている。また刻字がなくなつた経緯についても、前掲の二人の話とは違つて台風の影響とは認識していない。「徐氏過此」の刻字があつたことは知つてゐるが、いつ無くなつたのか、それについてははつきりとした答えを得ることは出来なかつた。話を聞き終わつて遊覧船案内所で得た写真を取り出してその位置を確かめてもらつたところ、刻字の痕跡が随分高いところに位置していることに関して、昔は今より海水の水位が高かつたためであるという。即ち、文字が刻まれた当時は水位が今より高かつたために船を付けて刻むことが出来たのだろうというのである。

道端で出会つた同じ村の文英權氏も同じような話をしてくれた。

「五百人を従えてね。まあ行きながら、不老草を求めに行きながらね、まあ船をつけて徐氏過此と書いたというが、あそ

こがその当時は、文字を書いた時はあの海水があれほどま
満ちていたということだね。船に乗って下から眺めてみても
見えないし、伝説がそうだということですね。はつきりと徐
氏過此だと書いておいたかあれも見えないし」

(慶尚南道巨濟市南部面笠串里 文英權 (六十四歳))

以上が海金剛村で聞いた徐市関連の話である。その後、小
毎勿島へ移動するため、午後六時のバスに乗つて再び統營に
戻つた。

(三) 統營の小毎勿島、灯台島の刻字 (三月二十七日)

現在、家が十四戸あり、凡そ四十人ぐらいが住んでいると
いう小毎勿島は、統營旅客船ターミナルから毎勿島フェリー
で一時間四十分程度離れたところに位置している。灯台島は、
この小毎勿島に接している灯台のある島のことをいう。通常
フェリーは統營旅客船ターミナル・比珍島・(大) 每勿島・小
毎勿島の順に運行するが、前年の八月にあつた台風 Maemi の
影響で小毎勿島の船着場が大きく破損したため、船は毎勿島
までしか通つていなかつた。そこで小毎勿島までは小毎勿島
に住む金一根氏 (六十五歳) のボートに乗つていくことになつ
た。同乗したのは船着場工事に出かける鄭元春氏 (六十一年)
そして観光客のカップル。隣に座つていた鄭元春氏にここに
伝わる伝説はないか尋ねたら、兄妹婚姻譚にまつわる兄妹岩
の伝説、そして昔、秦の始皇帝の時、不老草を探りに来て文

字を刻んで去つたという伝説があるといつて、あるいはその
文字が微かに残つているかも知れないという話を聞いた。鄭
元春氏が小毎勿島の船着場で降りた後、島巡りをかねて船主
の金一根氏に頼んで刻字があるかも知れないところへ
向かつた。灯台の後ろ側に至つた時、ボートはグルシンイ窟と
呼ばれる洞窟を通り抜けたが、ここが刻字があつたと伝わると
ころだとは気付かず、金一根氏に例の場所は何處かを聞いた
ら少し前の大窟のことをいうのだが、そう言い伝えられるだ
けであつてその文字は無いといわれた。

そこでこの刻字にまつわる話を聞こうと、小毎勿島の里長
の姜奉律 (六十九歳) 氏の家を訪れた。最初、里長はなかなか
口を開いてくれる気配がなかつたが、偶然その場に居合わ
せた四十代と見える男が、それは全部島の人々とは関係なく、
ここが観光地になるにつれて外から入つてきた人々によつて
作り出されたものだと話すと、これを機に話が進められた。

「昔は伝説も何もなく、食べていくのが精一杯だったわけです
が、それがいつの間にか観光地になつてから伝説も作られ、あ
いいう風になつたわけです、それが……。(そうですか) それで、
秦始皇がまあ遊びに来たやら何やら (ここ) からは里長の話) 秦
始皇が遊びにきたわけじやなく、秦始皇の一王が、人の住んで
いない時に、無人島だった時、大韓民国の島々を、不老草を求
めるこども兼ねて、秦始皇が送つたそだといふわけよ。まあ、



徐市たとがんあいつ窟のグルシ文字此う過市と

おかしいよ。不老草が見つかると、自分が食つちまうはずで、採つて帰るものか中国まで。で、大韓民国の島村をすべて、回り終えて、島村ごとに、無人島の島村ごとにすべてくまなく探して、観光を終えて、小毎勿島という、その時は名前もない、その時代だが、人も住んでいない無人島じやが、今になつて小毎勿島になり、小毎勿島灯台になつて、こうなつたんじやが、小毎勿島の灯台のところに来て、あの時は灯台もなかつたが、小毎勿島の灯台島、あそこに来て、不老草は採つたかどうか分からぬが、大韓民国の島村の観光を終えて、もう日本に行きます。ここを最後に終えて、日本に行きますという書面を残し、文字を書いたわけよ。書いたが、すぐ波に洗われるに違ひないから、のみで石をうがつたわけよ。のみをもつて文字をうがつたわけ。うがつようならこれを深くうがつたなら、この文字が今も残つているはずだ。ある程度形だけ作つておいたわけよ。で、漢字を、五十二文字書いたの、五十二文字。その時、大韓民国の島村の観光を終えて、くまなく、不老草があるかどうかすべて調べみて、不老草を探つていくという話はなく、これから日本に行きますということを書いて、最後に、一番最後の文字は何

観光もして、不老草があつたら採つてこいと。

で、俺はあれがちょっと

おかしいよ。不老草が

見つかると、自分が食つ

ちまうはずで、採つて帰

るが、今になつて小毎勿島にな

り、小毎勿島灯台になつて、こうなつたんじやが、小毎勿島の

灯台のところに来て、あの時は灯台もなかつたが、小毎勿島の

灯台島、あそこに来て、不老草は採つたかどうか分からぬが、

大韓民国の島村の観光を終えて、もう日本に行きます。ここを

最後に終えて、日本に行きますという書面を残し、文字を書いたわけよ。書いたが、すぐ波に洗われるに違ひないから、のみ

で石をうがつたわけよ。のみをもつて文字をうがつたわけ。う

がつようならこれを深くうがつたなら、この文字が今も残つ

ているはずだ。ある程度形だけ作つておいたわけよ。で、漢字

を、五十二文字書いたの、五十二文字。その時、大韓民国の島

村の観光を終えて、くまなく、不老草があるかどうかすべて調

べみて、不老草を探つていくという話はなく、これから日本

に行きますということを書いて、最後に、一番最後の文字は何

を書いたかということ、責任者は徐市だということじゃ。徐市が責任者で、日本に行きます、こう書いておいたわけ。(五十二文字を書いたんですつて?) 漢字で五十二文字を書いたんだ。

(最後に徐市が日本に行くということを書いたんですか) 責任者は徐市だと。だから、あそこに着いた人員が何百人、載つていたかも判らないことになっている。(五十二文字の大体の内

容は知っていますか) その内訳は聞いたことでは五十二文字に足りていらないんだけど、まあ、何か他の内訳があるはずだ。(と

ころで、まあ、この話は誰から聞きましたか) この話は、ここに人が住んで以来、歴史は、百十～二十年あまり経つたんだけ

ど、その時、一番先に、ここへ住むため、入つてきた人は、皆死んでしまつて、今はその子供らも死んで、孫らが生きている

んだ。そのお爺さんから聞いた話なんだ。そこに行つたらあ

いう文字があつたんだと、ここに住むために入つてきた人が、

あそこに行つてみたらああいう文字があつたんだと。そこで、

あの峰のことを、人が住むようになつてから、文字が書いてあ

るからといってグルシンイポンウリと呼んだわけ(文字が書い

てあつた峰といつてグルシンイポンウリ)。そうそう。その前まではあんな文字を見もせず、ここに人が住んでいなかつたし、

無人島になつていた時はあんな名前はなかつたわけよ。まあ、

名付ける人が何処におるんだ。人も住まなかつたのに…。(で

すから昔はこの小毎勿島がグルシンイ? グルシンイ?) 昔といふことは知らないんだ。昔には人が住んでいなかつたのにグル

シンイボンウリと名付ける者が何処におるんだ。（何時からあ

あいう風に?）だから百二十年経つたって、歴史が…。（その

時からグルシンイボンウリに?）文字が書いてあるつていつて

ここに来て、ここに住むために入つてきて住んでいた人達が、

ああいう名をつけたんだ。（住んでいた人達があんなに呼んで

いたわけですね。正確な名前がグルシンイ、その時、何と呼ん

だんですか）グルシンイボンウリ。今もそう呼んでいる。グル

シンイボンウリ。文字が書いてあるといつてグルシンイボンウ

リ。あそこに登つていけば四つが立つてある。指のよう。あ

そこ、登つていけば…。（四つが立つてあるって? 四つが立つ

ているとはどんなお話をですか）灯台、灯台、小每勿島の灯台の

後面に灯台に接した峰が、まあ四つ立つてある。指のよう。

その峰をグルシンイボンウリと、あそこに文字が書いてあるか

らといって。ここに住むため、入つてきた人達がああいう名を

つけたわけなんだ」

（慶尚南道 統營市 閑山面 每竹里 姜奉律・六十九歳（小

毎勿島の里長）

李盛熙氏（四十三歳）も、この伝説についてはよく知っていた。

「秦始皇が、秦始皇の臣下のうち、一人が不老草を求めて下つ

てきて、ありますよ。向こうの岩に書いてあるつてそういう話を

聞きました。徐市過此つて…。求めに来て、見つけられず、ここ

の景色があまりにも良くて、あそこに書いておいたと、そういう

ことを聞きました。（それを誰から聞きましたか）下の村の方か

ら聞きました。村の人がそういう話をしてくださいました。

（ここに住んでいる方ですか）私は、島に入つて一ヶ月にな

りますが、職場を辞めて、休養を兼ねて暫く、休みに来ました」

（釜山市 南区門峴二洞六〇六—二〇李度瑾・三十二歳（小每

勿島））

「始皇帝が、秦の始皇帝が、昔、不老草を求めるために東方に多くの人々を送つたんです。したがつて、船団を成したはずです。そして、東方に来て、去る途中で、この島に寄つたん

です。寄つていて島があまりにも美しくて、まあ、見回つてからあそこに、徐市という人が徐市過此と、こう書いたんです。

徐市が来て去つたという、ああいう意味として文字を残したんです。それで、あのまあ、文字を残したところをまあ、あれをグルシンイ窟と呼んだんです。人々は方言で、まあグルシンイ窟と言います。グルシンイ窟というんですけど、実はそのグルシンイ窟の徐市過此という文字を見た人は誰もいません。だた、そ

う言い伝えられてきています。（その位置はどの辺りですか）（三十二歳）氏、そして数年前からこの島に住んでいるという

あの灯台島に行けば洞窟が出来ています。船が通りますが、そこに書いておいたんです」（慶尚南道 統營市 閑山面 每竹里 hill house 李盛熙四十三歳（小每勿島）

伝説は性格上、外の人間からすると首を傾げそうな事柄に對しても、その地域住民の間では眞実として固く信じられているケースが多い。したがつて、内なる者と外なる者の間にはなかなか縮まらないギャップがあり、常に外なる者はその信憑性をめぐつて疑いの目で見がちであるが、このグルシンイ窟に関しては少し冷静になつて考へるべき出来事があつた。小毎勿島での調査を終えた翌朝、濟州島行きの船に乗る直前に、統營市郷土歴史館に寄り、前日に聞いた伝説のことを館長の金一龍氏に話したら、少し驚いたように目を丸くして、実は『統營誌』に「毎味島」に関する記録があるが、その中に似たような話が載つているといつて、その部分をコピーしてくれたのである。次は『統營誌』に掲載されている徐福関連記事の内容である。

「每味島在營之東南巨濟境登山外洋中加背梁栗浦兩鎮搜討處也、石壁有徐氏過此四字之刻、又有壬亂倭酋敗歸時七律題刻海蚌乘陽怕水寒 鶴禽何事苦相干 身離窟穴朱胎損 力盡沙灘翠羽殘 閉口豈期開口禍 入頭雖易出頭難 早知俱落漁人手 雲水飛潛各自安」

『統營誌』の成立年代は不明であるが、館長の話によれば、

統營の地誌である、これに見られる毎味島の名は現在の統營市に属している大毎勿島と小毎勿島、そして灯台島の三つの島を合わせたものの古称であるという。これは換言すれば、これらの島の中、どれかの石壁に「徐氏過此」の四文字、また七言律詩「漁夫之利」の五十六文字が刻まれていたことを意味する。前日、小毎勿島からの帰りに大毎勿島にも寄つて、何人かに聞いてみたが、自分たちの村には「徐市過此」と関連した刻字の伝承はないといわれた。これを考へ合わせれば『統營誌』に掲載されている「徐氏過此」の四文字、また七言律詩の内容は、他ならぬ小毎勿島の里長の語る、「徐市過此」の伝承である可能性が極めて高い。しかし、灯台島の後面にあつたというその刻字は、なんらかの事情があつてのことか、今はその文字を見たという人も、その行方を知つているといふ人も生存しておらず、ただ伝説だけが生き残つてゐるのであつた。

三、その他の徐福伝説

(一) 全羅南北道と慶尚南北道の徐福伝説

徐福が渡来したという伝説は、日本では青森県から鹿児島県まで、広く分布している。一方、韓国においては韓国の南部地域、特に全羅南北道、そして慶尚南北道に集中して見られる。また、刻字と関連した南海島、巨濟島、統營の三箇所はいずれも慶尚南道の南の海に位置する島々だという点が特徴的である。こ

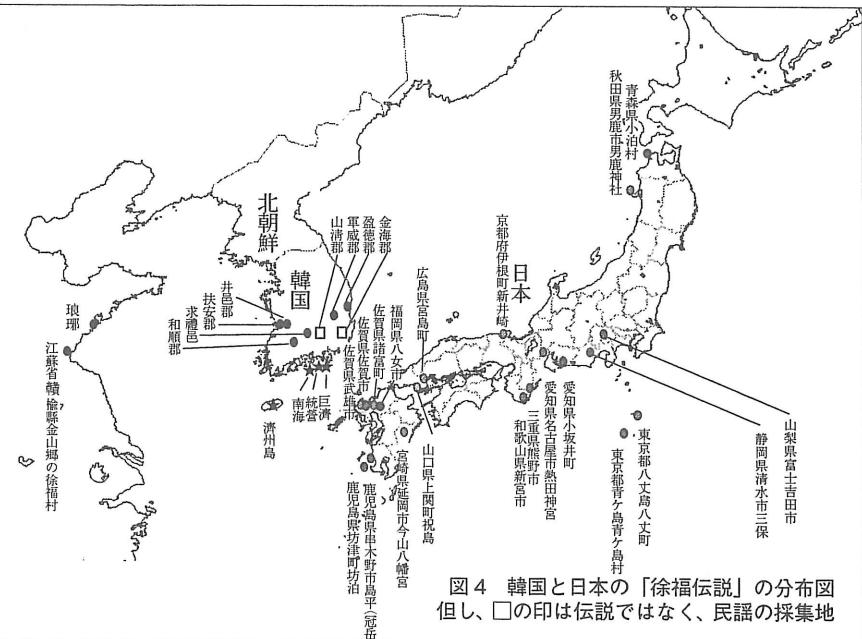


図4 韓国と日本の「徐福伝説」の分布図
但し、□の印は伝説ではなく、民謡の採集地

の様に、韓半島では中部以北においてはこの伝説が殆ど見られず、南部地域に集中している。

では、全羅道と慶尚道地方では徐福の渡来と彼らの方についてどのように語られているのかそのあらすじを見てみよう。

【伝説A】..「秦始皇と不老草」

（全羅北道 井邑郡 泰仁面 弓四里 弓四老人会館
（一九八五年・四月十八日）ユンギソクメイ・セトウセイ
（七十七歳））

① 昔、秦始皇が六十歳を過ぎて、「どうすれば延命することができるか」と考えて、ある日、すべての臣下を呼び寄せて「おい、お前ら！この世に老人が老いもせず、死ぬ人が死にもせぬ薬があるか」と問う。皆が補藥や大人參やらを食べなさい」というと、臣下のうち、一番末席の者が立ち上がって「老人が死にもせず、また老いもしない、間もなく死ぬ人でも死なない薬があります」という。王はその臣下を近くに寄せて「では、何の薬が一番か」というと「はい、その薬を求めるには言わば三神山の不老草を求めなければなりません」と答える。

秦始皇に「それならどうかその不老草をあなたが探してきてもらいたい」と言われると臣下は「あそこは遙か遠く、深いところで、一、二、三年間では出来ません。十歳前後の千人か二千人の童男童女を

同じく区分けして、百隻ほどの船に乗せて、一、二、三年間を過ぎしながら不老草を探し求めるわけであるので、一応農事をして食事を取らなければいけません。ですから豆の種や麦、種粉も要りますし、すべての種を備え、それにシャベルやくわ、ホミ（草かき）のようなもののすべてを備えてからこれらを乗せていかなければ不老草は求められません」という。秦始皇に船や種、童男童女を要求し、また着る服のために綿布千匹を船に乗せて出発する。

出発すると臣下の人は「まあ、これで俺たちの天下だ」と言いながら数日を掛けてたどり着いたのが日本であつたが、そこは広々とした大平原だけあって野原も畠も何もない。

（臣下の人は）どうしようもなく男女一人ずつを夫婦に添わせてやる。森林の山のところであればヤマ、野のところであればノハラ、畠のところが多ければハタケ、川のところであればカワと名付けてから全部を日本のあつちこつちの土地に割りあてた後、「鍬を持っている人、ホミを持っている人、種を持っている人！お前らはこの辺りで種蒔きをしてお前ら同士で食つて暮らしていけ」とし、また持つてきた綿布千匹で着物を作つたという。

結局、五十年間ぐらいが経つてしまい、血氣盛りの童男童女たちが子供を生んで、人口が増え広がり、日本の土地に根付いてしまつたが、秦始皇はひょっとすると思つていつ届くかと不老草を首を長くして待ち焦がれていて、待ち倦んだ末、

目が腐りくずれて死んだという。忠臣とは言えないが、その臣下が行つて発展させて日本をつくったという。

【伝説B】・「秦始皇ばなし」（全羅南道 和順郡 寒泉面 한계리 一三区（一九八四年・七月・二十六日）조국환男・七十一歳）

① 秦始皇が天下統一を成し遂げると、死から逃れたく、不死の薬を求め、臣下達に「朕が死せぬ薬を探してこい」という。仕方なく臣下の徐氏という人が「それなら私が出かけて不死の薬を探してきます」と三神山へ不死の薬を求めに行く。臣下の徐氏は秦始皇に「童男童女の五百人を下さい」といって、未婚の男子二百五十人、処女二百五十人を合わせて何ヶ月分もの食糧を用意してもらつて旅立つ。

② 徐氏は濟州島を経て日本の対馬に渡つていき、五百人の童男童女を助けてやる。

【伝説C】・「英陽南氏の始祖」（慶尚北道 盈徳郡 盈徳邑 덕곡동（一九八〇年・六月八日）서두석男・六十一歳）

① 秦始皇が「長生不死の不老草が海東朝鮮にある」という。それを求めて來い」といって、南氏の始祖になる人が船に乗つて東の国のが国に向かつて渡つてきだが、途中、船が風浪に遭い、九死に一生を得て丑山の竹やぶのところに漂着していたのを川辺の人たちが引き上げてやる。

不死の薬を見つけずに帰ると殺されるため、帰らないで我が國に帰化していたが、員（郡守）が王様に訴えたところ、「南に着いたから姓を南氏にしろ」といつて南氏の始祖に

なつたというが、どうして英陽に行つたのかは分からぬ。

英陽南氏の始祖は丑山港で降りて姓を賜わつたという。

【伝説D】：「秦始皇と不老草」（慶尚北道 軍威郡 孝令面

將軍三洞（一九八二年・七月二十七日）サゴヨ男・八十三歳）

① 昔、秦始皇が六国の天子になり、三千宮女が秦始皇を侍衛し、権勢を振舞う頃、臣下の徐市が思うには「万里長城を

築造し、阿房宮を建てるなどこんなに民に悪行を働いたも

のだから、俺もこれの下においては天寿をまつとうすることも出来ず、夭折するはずだ。王を騙して出るより他はない」

と考えて、秦始皇に「臣の聞いたところ、南川へと進むと三神山があつてその山へ入つていくと不老草もあつて不死薬もあるというので、小臣の忠誠は微力ながら忠誠を尽くし力を竭して不死薬を求めてきます」という。

② 童男童女の妻を娶つていらない子供ら五百人と嫁に行つて

いなない処女らの五百人、そして三年間食べる糧食や服を

載せて、徐市は「三神山が何処だか」「不老草が何なのか」

「不死薬がどうだか」と歌つて三神山へと行く。

③ 秦始皇は沙丘の平台という砂を高く積んで建てた家でいつも不死薬を探つてくるといつて南川の方だけ眺めていて沙丘の平台から落ちて死に、驪山といふところに葬られる。

④ そこで「沙丘の平台日暮れ、驪山に荒草だけだ」といわれる。

【伝説E】：「徐氏過此（徐市過此）」（慶尚南道 巨濟郡 河

男・六十一歳）

昔、秦始皇の時、徐氏が思うにどうしてもこの秦始皇についてでは将来大きく成長することは出来ないと思つたと。ほら、阿房宮を建てて万里の長城を築き、自分で累代に渡つて自分の権勢を振舞おうとするもので、いいことを思ついて、「ほかならぬ長寿の薬がござります」

「何？」すると、「三神山に行けば不老草、不老薬がござります」といつたと。

このことを聞いて「それじゃどうすればよからう」。

大きな船に、人を呼び集めて、要するに十五歳の処女二百五十人、十五歳のチヨンガーヒ百五十人を乗せて、米もぎつしりと積んでもらえば自分が三神山に（向かうと）。三神山が何処かというと、全羅道の智異山と濟州島の漢拏山と江原道の金剛山で、これが三神山なのである。求めてくるといつて来ながら、何しに来るものか。あの全羅道に来たところでここを過ぎていつたと「過此」と書いて、そしてあの今のこここの海金剛のところに、過ぎていったと「過此」と書いて、あのあそこの何といふドンモリ（동여리）の、小山のあそこに「過此」と書いて（調査者：何處にですか）、ドンモリの灯台のところにあれを書いて、それから日本に渡つてしまつたわけよ。

清面 於温里 長串（一九七九年・七月・三十日）林泰珍

（二）濟州島の刻字と伝説

旅の最後の目的地である、濟州島の正房瀑布に向かうため、

統營旅客船ターミナルで濟州島行きの MANDARIN 号に乗ったのは三月二十八日の午前十時、統營市郷土歴史館を出た直後のことである。船は南に走り、四時間後の二時に濟州島の城山浦港総合旅客ターミナルに着いた。ここ城山浦港入口から正房瀑布は西帰浦へ向かって海沿いの道路をバスで一時間ほど走つた後、西帰浦市付近で降り、タクシーで五分ぐらい入つたところの海岸に位置している。高さ二十三メートル、幅八メートルもあるこの瀑布は、海に直下する滝としては東洋では唯一のものと言われており、いつも内外から訪れる多くの観光客で賑わつてゐるが、観光客が途絶えないもう一つの理由は、昔からこの瀑布の岩壁には「徐市過此」の四文字が刻まれていたという伝説が伝わつてゐるからである。この四文字にまつわる伝説は次の通りである。

【伝説F】「徐市と不死薬」（西帰邑好近里（一九五六年三月）

고향일氏談）

「昔、中国の秦始皇の時、徐市という人が濟州島を遊覧したことがあつた。徐市は秦始皇の寵愛を受けた人で、海外遊覧がしたくて、秦始皇に三神山にあるといふ不老草を探つて服用すれば永遠に生きることが出来ると進言した。「不老永生だと」欲深な秦始皇である。拒むはずがなかつた。彼は直ちにその葉草を求めてくるよう命じた。徐市は崑崙山で千年もの古木を伐つて船を作り、童男童女五百人を従えて出発した。黄海を経て、徐市は朝天浦に船をつけて神仙の実というアムゴ

ラン（シロミ）を得た後、西帰浦を経て、日本に渡つた。果して徐市が不老草を探したかどうかは知らないが、今も朝天浦と西帰浦の正房瀑布の岩壁には「徐市過此」と刻んだ文字が残つてゐる」

実際にここ正房瀑布の岩壁に「徐市過此」の刻字があつたかどうかは定かではない。が、濟州島には確かに「徐市過此」と関わる刻字が存在していたらしい。それは塚原薰の「濟州島に於ける秦の徐福の遺蹟考」に紹介された一枚の拓本によつて確認できる。拓本の傍らにはその拓本の出所を示す内容とそれを書いた夢人丁鶴喬（一八三一～一九一四）の名が記されている。それは次の通りである。

「秦始皇二十八年方士徐市等與童男女入海求三神山不死藥過朝鮮國耽羅嶋刻石壁曰徐市過之此徐市過之四字之刻已至數千載哉東古蹟無有及於此訪以拓之人傳玩無方神物之顯與晦自有其時金侍郎秋史先生曰累滯海島窮搜多摺以之流布此幘示其一紙從茲好古之士可助眼福之一簣世餘年事也 夢人丁鶴喬」

要するに、秦始皇帝の命を受けて三神山の不死薬を求めて海上遊覧がしたくて、秦始皇に三神山にあるといふ不老草を探つて服用すれば永遠に生きることが出来るといつて進言した。「不老永生だと」欲深な秦始皇である。拒むはずがなかつた。彼は直ちにその葉草を求めてくるよう命じた。徐市は崑崙山で千年もの古木を伐つて船を作り、童男童女五百人を従えて出発した。

「西帰浦沿邊有峭壁不啻數千仞下臨滄海鯨濤洶湧世傳壁半有

秦方士徐市所刻字痕云先是牧使白樂淵巡行到此人以此説告之遂

命自壁上以長繩繩一人下垂引之摸其字跡而還蓋字體如科斗雕虫者凡十二個字而不可鮮得云

この記事でより具体的に西歸浦沿邊の峭壁に秦の方士徐市の刻字があつたことが分かる。そして牧使の白樂淵が巡行中にこの話を聞いて、人を使って摸した事実や科斗文字のような凡そ

十二個の字は解することが出来なかつたことも理解できる。

秋史金正喜の拓本、そして西歸浦沿邊の刻字が実際に正房瀑布の岩壁の刻字なのがどうかは不明である。しかし、いずれにせよ、これらの資料の出現は徐市の濟州島渡來と深いかかわりがあることを物語つている。こういつた資料が次々と出てくるにつれて、正房瀑布の岩壁に対する関心が高まり、一九九二年には刻字の調査團が構成され、その周辺一帯の調査が行われた。しかし、三月十五日から八月三十日まで五ヶ月間にわたる正房瀑布一帯の岩壁調査にもかかわらず、「徐市過之」の刻字は見つからなかつたという。

四、まとめ

韓國の徐福伝説の持つ意義は、正史には見えない徐福の方を、一つ一つ具体的に照らしだし、古代における文化の伝播や影響関係を詳細に描き、教えてくれるというところにある。そしてまた、堅く閉ざされた眞実の暗い門に黎明を告げ

る一筋の光が差し込んで、徐福の足跡を明るく示してくれる、という点で、韓國の徐福伝説は中国や日本の徐福伝説研究と平行して、海の彼方にあるはずの徐福の行方を追う手がかりとしても重要で、これらの伝説の持つ意義は極めて大きく意味深いと思われる。

参考文献

〈韓国の文献〉

- ・ 康京守外5人編『瀛洲徐福文化（創刊號）』二〇〇三、（社）西歸浦市徐福文化國際交流協會
- ・ 金錫翼著・杏文會編『心齋集（II）』「破闇錄上」、一九九〇、濟州文化社　頁三一二～三
- ・ 『輿地圖』「東國八道大總」、木版本（十八世紀後期）、許玩鍾所藏
- ・ 横里鎭은나무編集部『（韓國の發見）慶尚南道』一九八三、
- ・ 横里鎭은나무　頁一九七
- ・ 横里鎭은나무編集部『（韓國の發見）全羅南道』一九八三、
- ・ 『徐福と東亞細亞文化交流（徐福國際學術大會）』二〇〇一、
- ・ （社）西歸浦市徐福文化國際交流協會　社團法人濟州學會『徐福と東亞細亞文化交流（第2回 徐福文化國際學術大會）』二〇〇三、（社）西歸浦市徐福文化國際交流協會
- ・ 藝能民俗研究室編輯『口碑傳承資料（全南・北道）』

一九八七、文化財研究所

濟州徐福研究會編輯『正房瀑布徐福遺蹟調查報告書』

一九九二、西歸浦市

濟州學會編『濟州島研究（第二十一輯）』二〇〇二、社團法人濟州學會

秦聖麒『神話と伝説』二〇〇一（二十版）、濟州民俗研究所

頁一七一

統營（朝鮮）編『統營誌』（刊年未詳）

韓國民謠學會編『韓國民謠學』第7輯 一九九九、民俗苑

頁二八六

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』五六 全羅北

道 井州市・井邑郡篇（二）、一九八七、高麗苑 頁三六三

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』六十一全羅

南道 和順郡篇（三）、一九八七、高麗苑 頁二二七

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』七十七 慶尚

北道 益德郡篇（二）、一九八一、韓國精神文化研究院 頁

七一五

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』七十一慶尚

北道 軍威郡篇（一）、一九八四、高麗苑 頁三四七

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』八一 慶尚南

道 巨濟郡篇、一九八〇、韓國精神文化研究院 頁三三〇

韓國精神文化研究院編纂『韓國口碑文學大系』八十九 慶尚

南道 金海市・金海郡篇、一九八三、韓國精神文化研究院

頁一〇八六

洪淳晚著『徐福集團と濟州島』二〇〇二、濟州文化院

洪淳晚「徐福船團の大探險」（一九九〇・十月十五日）

一九九一七月二十九日 月曜連載 漢拏日報

〈中國の文献〉

衛挺生『徐福與日本』（香港・一九五三）

香港徐福會『徐福與日本』（香港・一九七六）

〈日本の文献〉

司馬遷著・野口定男訳『史記（上）』中国古典文学大系 第一

○卷、一九六八、平凡社

司馬遷著・野口定男訳『史記（中）』中国古典文学大系 第

一一卷、一九六九、平凡社

司馬遷著・野口定男訳『史記（下）』中国古典文学大系 第

一二卷、一九七一、平凡社

塚原烹『濟州島に於ける秦の徐福の遺蹟考』『朝鮮』四卷六

号、一九一〇、朝鮮雜誌社 頁四〇九

達志保著『徐福伝説考』――「徐福渡來說」の謎を追

う、一九九一、波乘社

（ホ・ワソジヨン／関西外国语大学大学院博士課程後期）